

博士論文（要約）

論文題目 昭和初期左翼運動における権威性確立過程の研究

氏名 立本 紘之

「昭和初期左翼運動における権威性確立過程の研究」

○目次

・はじめに

： 四頁

・第一章：プロレタリア文化運動の萌芽と同時期の思想状況

： 三二頁

第一節：プロレタリア文芸雑誌の創出と知識人の運動参加

： 三三頁

第二節：一九二〇年代初頭までの日本における理論紹介と思想状況

： 四四頁

第三節：雑誌『文芸戦線』の創刊とそれを取り巻く状況

： 五三頁

※小括

： 五九頁

・第二章：運動理論の大転換と文化運動組織の再編

： 六二頁

第一節：福本主義の登場と運動権威形成の萌芽

： 六四頁

第二節：スターリンの登場・権威化と、さらなる権威担保構造の形成

： 七六頁

第三節：文化運動の組織化と変容

： 八一頁

※小括

… 九六頁

・ 第三章：文化運動組織の「分離・結合」とその背景

… 一〇一頁

第一節：文芸組織分裂・鼎立の時代

… 一〇三頁

第二節：二七年テーゼの到来とそれへの対応

… 一一四頁

第三節：文化運動組織の再分裂と合同への動き

… 一二二頁

※小括

… 一二九頁

・ 第四章：文化運動組織の発展と権威構造の形成

… 一三四頁

第一節：ナツプの誕生と「芸術大衆化論争」

… 一三六頁

第二節：ナツプの実践活動と理論の変容

… 一六二頁

第三節：再度の大衆化論争と運動原則の確立

… 一七三頁

※小括

… 一九二頁

・ 第五章：一九三〇年前後の党運動と文化運動

… 二〇〇頁

第一節：党運動と文化運動の接触 ……二〇二頁

第二節：「戦旗社」事件と文化運動における党権威の拡大 ……二一〇頁

第三節：文化運動の方針転換と権威としての蔵原惟人 ……二二七頁

※小括 ……二四七頁

・第六章：コップ結成後の文化運動の進展と衰退 ……二五四頁

第一節：コップ新雑誌の展開と大衆化の模索 ……二五五頁

第二節：弾圧と活動方針をめぐる文化運動内部の動き ……二七一頁

第三節：組織的党・文化運動の終焉期における文化運動者の諸相 ……二八一頁

※小括 ……三〇六頁

・おわりに

第一節 戦後の党運動と戦前期文化運動の残照 ……三一六頁

第二節 むすびにかえて ……三三〇頁

○本文

本論文全体が、

立本紘之『転形期芸術運動の道標―戦後日本共産党の源流としての戦前期プロレタリア文化運動』(晃洋書房、二〇二〇年三月、ISBN 978-4-7710-3337-5)として刊行されるため全文公表できません。

○参考文献一覧

【論文・寄稿文】

「プロレタリア美術運動の回顧5―永田一脩氏にきく」(『美術運動』一〇四号(日本美術会一九七七))

「プロレタリア文学にたおれた人々」(『多喜二と百合子』4(多喜二・百合子研究会一九五四))

「座談会 新しい文学運動の出発―戦後民主主義文学運動の再検討―」(『民主文学』72号(民主主義文学会一九七一))

「座談会・プロ科の運動をめぐって」(運動史研究会編『運動史研究』2(三一書房一九七八))

「生江健次予審問調査」(『運動史研究』3(三一書房一九七九))

「党創成期の革命家たち」(運動史研究会編『運動史研究』9(三一書房一九八二))

「日本で刊行されたレーニンの著作の目録Ⅱ 戦前編」(『前衛』一九六〇年七月号(日本共産党出版部一九六〇))

いいだ・ももしまね・きよし「宮本顕治と神山茂夫」(『現代の眼』13(1)(現代評論社一九七二))

タールハイマー「理論家としてのレーニン」(久留間鮫造訳)(『大原社会問題研究所雑誌』3(1)(4)(大原社会問題研究所一九二五))

ひろし・ぬやま「新しい文化のために(下)」(『アカハタ』一九四七年一月八日)

伊藤晃「日本共産党分派「多数派」について」(運動史研究会編『運動史研究』1(三一書房一九七八))

浦西和彦「貴司山治日記一九三四年(昭和九年)(一)」(『国文学』81(関西大学国文学会二〇〇〇))

岡田ハル子「岡田文吉、臨終の叫び(1)」(『毛沢東思想研究』一九六七年十一月号(毛沢東思想研究会))

加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書(上)」(『大原社会問題研究所雑誌』四八九号(法政大学大原社会問題研究所一九九九))

加藤哲郎「非常時共産党の真実」(『大原社会問題研究所雑誌』498(二〇〇三))

貴司山治「プロレタリア作家に寄する書」(『朝日新聞』三三年五月四日)

- 貴司山治 「作家の言い分8 正直に申し上げる」(『朝日新聞』一九三〇年一月二一日)
- 貴司山治 「私とプロレタリア文学」(『文学』33(3)(岩波書店一九六五))
- 貴司山治 「文学大衆化の明日(1)」(『朝日新聞』一九三〇年四月一八日)
- 久板栄二郎 「芸術運動と地方機関誌」(全日本無産者芸術聯盟関西地方支部協議会機関誌『プロレタリア』一九二九年一月創刊号)
- 宮本顕治 「共産党・労働者党情報局の論評の積極的意義」(『前衛』四九号(一九五〇年四月))
- 金子洋文 「エッセイ わが若き日々 2 『種蒔く人』発刊とインターナショナル」(『月刊社会党』327(日本社会党中央本部機関紙局一九八三年八月))
- 金斗鎔・江口渙 「朝鮮プロレタリア文学運動の史的展望」(『民主朝鮮』第4年第31号(民主朝鮮社一九四九年九月))
- 窪川鶴次郎 「大衆文学とブルジョワ文学」(『朝日新聞』一九三一年一月一日)
- 栗原幸夫 「『日本共産党の六十年』とプロレタリア文化運動」(栗原『歴史の道標から』(れんが書房新社一九八九))
- 栗原幸夫・針生一郎 「リンチ事件・スパイ問題・非常時共産党」(『新日本文学』一九七七



年七月号)

高屋定国「山川均の「方向転換論」に関する一考察」(『キリスト教社会問題研究』2号(同志社大学人文社会研究所 一九五八))

佐藤一郎「『プロ科』時代の思い出 前半生を顧みて」(運動史研究会編『運動史研究』2(三一書房 一九七八))

佐野学「コミンテルンの批判を読む」(『社会科学』二八年二月号(改造社 一九二八))

堺利彦「大正八年の社会的総勘定」(『雄弁』十一卷一号(大日本雄弁会講談社 一九一九))

山川均「或る青年に与ふ」(『進め』第一卷第三号(進め社 一九二三))

鹿地亘「ナルプの解散について」(『文学評論』一九三四年四月号(ナウカ社 一九三四))

手塚英孝「神吉洋士のこと」(『文化評論』(八〇) 一九六八)

勝部元「共産党の「自主独立」路線とは何か 国際権威主義の裏返し」(『エコノミスト』一九七三年一月一七号(毎日新聞社))

小山弘健・小山仁示「大正社会主義の思想分化」(『思想』(466)(岩波書店 一九六三))

小田切秀雄「『ナップ』の眼鏡をはずせ」の回想と必要な補足」(『新日本文学』54(4)(新日本文学会 一九九九))

小田切秀雄 「人間性の時代から―侮蔑の時代と知識人」(『朝日ジャーナル』8(41)(朝日新聞社 一九六六)

小林勇 「人間を書きたい 11 二人のエスペランティスト 伊東三郎と中垣虎児郎」(『芸春秋』50(14) 1972)

針生一郎 「ソヴェト芸術論と蔵原惟人の役割」(『文学』(49)(3)(岩波書店 一九八一)

針生一郎 「ソヴェト文芸理論と日本プロレタリア文学」(『文学』四七(九)(岩波書店 一九七九)

針生一郎 「ソヴェト文芸理論と日本プロレタリア文学―平林・中野・蔵原をめぐって―」(『文学』(47)(9)(岩波書店 一九七九)

杉浦晋 「蔵原惟人論―芸術大衆化論争の歴史に関する一考察」(『稿本 近代文学』17(筑波大学文芸・言語学系内 平岡研究室 一九九二)

青野季吉 「解放戦と芸術運動」(『東京朝日新聞』一九二三年八月二五〜三〇日)

石田英一郎 「学生運動の回顧」(『思想の科学』第5次 26号(思想の科学社 一九六四)

千坂恭二「バクーニンとクロポトキン アナキズムとマルクス主義の対立史観の由来について」(『情況』二〇〇九年五月号(情況出版 二〇〇九)

- 川口浩「青春の雰囲気」(『文化革命』一卷八号(日本民主主義文化連盟 一九四八))
- 川内唯彦 きき手 犬丸義一「反宗教同盟、唯研創立のころ」(『現代と思想』(4)(青木書店 一九七一年六月))
- 蔵原惟人(聞き手 西田勝)「プロレタリア文学運動について」(『文学』三〇卷一二号(岩波書店 一九六二))
- 蔵原惟人「プロレタリア文学運動について」(『文学』30(12)(岩波書店 一九六二))
- 太田慶太郎「ナツプ創立前後」(『文化評論』(一六)(日本共産党中央委員会 一九六三))
- 中川成美「ハリコフ会議経緯―勝本清一郎の役割を中心に―」(『日本近代文学』28(日本近代文学会 一九八一))
- 中野重治「独立作家クラブの頃―知識人の戦争体験」(『新日本文学』11(8)(新日本文学会 一九五六年八月))
- 中里喜昭「わり算の文学」(『葦牙』33号(同時代社 二〇〇七年三月))
- 田中清玄『赤色太平記』第二・三回(『現代』一九七六年二月号・三月号)
- 渡部徹「日本のマルクス主義運動」(『講座マルクス主義』12(日本評論社 一九六九))
- 内野壮児「日本共産党の教訓(11) 労働農民党と評議会の再建闘争」(『労働運動研究』

五五（労働運動研究所 一九七四）

二村一夫「『無産者新聞小史』（上）（『大原社会問題研究所資料室報』（247）（法政大学大原社会問題研究所資料室 一九七八）

平林初之輔「芸術の「面白さ」（『朝日新聞』一九二八年六月二五日）

立本紘之「一九二〇年代日本左翼運動における「知」の転換―ドイツからロシアへ」（『東京大学日本史学研究室紀要』17号（東京大学日本史学研究室 二〇一三）

立本紘之「書評 大和田茂著『社会運動と文芸雑誌』（『大原社会問題研究所雑誌』656号（法政大学大原社会問題研究所 二〇一三）

立本紘之「書評 尾西康充著『小林多喜二の思想と文学―貧困・格差・ファシズムの時代に生きて』（『大原社会問題研究所雑誌』671・672号（法政大学大原社会問題研究所 二〇一四）

立本紘之「昭和初期プロレタリア文化運動の組織化に伴う運動権威の形成」（『東京大学日本史学研究室紀要』15号（東京大学日本史学研究室 二〇一一）

林房雄「プロレタリア文学と「大衆文芸」の関係（中）」（『読売新聞』一九二九年一月一七日）

【書籍】

- 『伊東三郎 高く たかく 遠くの方へ 遺稿と追憶』（土筆社 一九七四）
- 『岩波 哲学・思想事典』（岩波書店 一九九五）
- 『岩波社会思想事典』（岩波書店 二〇〇八）
- 『近代日本社会運動史人物大事典』二（日外アソシエーツ 一九九七年）
- 『社会問題資料叢書 11号 日本共産党に対する批判 其の二（思想研究資料特輯 15号）』（社会問題資料研究会 一九七三）
- 『集英社 世界文学大事典』5（集英社 一九九七）
- 『日本のプロレタリア文学』（青木書店 一九五六）
- 『日本プロレタリア文学大系』五卷（三一書房 一九五五）
- 『日本プロレタリア文学評論集』3「平林初之輔、青野季吉集」（新日本出版社 一九九〇）
- 『日本プロレタリア文学評論集』7「後期プロレタリア文学評論集」2（新日本出版社 一九九〇）
- 『日本共産党の五十年』（日本共産党中央委員会機関紙経営局 一九七二）

- 『日本共産党の六十年』（日本共産党中央委員会出版局 一九八二）
- 『日本共産党の六十五年』（日本共産党中央委員会出版局 一九八八）
- 『日本共産党の七十年』（新日本出版社 一九九四）
- 『日本近代文学大事典』第四巻・第五巻（日本近代文学館 一九七七）
- ケヴィン・マクダーミット ジェレミー・アグニュー（萩原直訳）『コミンテルン史 レーニンからスターリンへ』（大月書店 一九九八）
- マルクス『インタナショナル』（新日本出版社 二〇一〇）
- 伊藤晃『天皇制と社会主義』（勁草書房 一九八八）
- 浦西和彦『浦西和彦 著述と書誌』第三巻（和泉書院 二〇〇八）
- 塩沢富美子『野呂栄太郎の思い出』（新日本出版社 一九七六）
- 奥平康弘『治安維持法小史』（岩波現代文庫 二〇〇六）
- 刊行委員会編『山本正美裁判関連記録・論文集』（新泉社 一九九八）
- 関幸夫『山川イズムと福本イズム』（新日本出版社 一九九二）
- 岩崎昶『日本映画私史』（朝日新聞社 一九七七）二二頁
- 亀山幸三『戦後日本共産党の二重帳簿』（現代評論社 一九七八）

- 亀山幸三『代々木は歴史を偽造する』（経済往来社 一九七六）
- 宮本顕治『宮本顕治文芸評論選集』第一卷（新日本出版社 一九八〇）
- 金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学 一九八四）
- 栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』（平凡社 一九七一 増補新版 インパクト出版会 二〇〇四）
- 犬丸義一『第一次共産党史の研究』（青木書店 一九九三）
- 江口渙『たたかひの作家同盟記』上・下（新日本出版社 一九六八）
- 荒畑寒村『寒村自伝』（岩波文庫 一九七五）
- 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第十二卷（吉川弘文館 一九九一）
- 黒川伊織『帝国に抗する社会運動 第一次共産党の思想と運動』（有志舎 二〇一四）
- 佐々木孝丸『風雪新劇志』（現代社 一九五九）
- 笹本寅『文壇郷土誌 プロ文学篇』（公人書房 一九三三）
- 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』（岩波書店 一九六一）
- 山田清三郎『プロレタリア文学史』下（理論社 一九五四）
- 山辺健太郎編『現代史資料』（一四）・（一九）・（二〇）（みすず書房 一九六四・一九六七）

一九六八)

山辺健太郎編『続・現代史資料』(2)(6)(みすず書房 一九八二・一九八六)

山本正美『激動の時代に生きて―共産主義者の手記』(マルジュ社 一九八五)

志賀義雄『志賀義雄選集』1(五月書房 一九九一)

鹿地亘『自伝的な文学史』(三一書房 一九五九)

鹿地亘『文学運動の新しい段階のために』(国際書院 一九三三)

『種蒔く人』『文芸戦線』を読む会編『フロンティアの文学・雑誌『種蒔く人』の再検討』

(論創社 二〇〇五)

秋田雨雀・江口渙監修『総合プロレタリア芸術講座』2(内外社 一九三一)

勝本清一郎『こころの遠近』(朝日新聞社 一九六五)

小林峻一・鈴木隆一『スパイM謀略の極限を生きて』(徳間書店 一九八〇)

松本正雄『過去と記憶』(光和堂 一九七四)

松本清張『昭和史探訪』「スパイ“M”の謀略」(文芸春秋 一九七八)

神山茂夫『日本共産党とはなんであるか 生きた事実で描く共産党戦後史への疑問』(自由

国民社 一九七二)



- 青野季吉『文学五十年』（『近代作家研究叢書 76』（日本図書センター 一九九〇））
- 青野季吉『文学的的人生論』（櫻井書店 一九四七）
- 石河康国『マルクスを日本で育てた人 評伝・山川均 I』（社会評論社 二〇一四）
- 石堂清倫『わが異端の昭和史』上（平凡社 二〇〇一）
- 川口浩『文学運動の中で生きて』（中央大学出版部 一九七一）
- 浅野晃『英雄色を好む・はだか交友録』（大樹書房 一九六一）
- 増山大助『戦後左翼運動人士』『戦後期左翼人士群像』（つげ書房新社 二〇〇〇）
- 蔵原惟人『蔵原惟人書簡集』（日本プロレタリア作家同盟出版部 一九三三）
- 蔵原惟人『蔵原惟人評論集』第四卷（新日本出版社 一九六七）
- 蔵原惟人・手塚英孝編『物語 プロレタリア文学運動』上（新日本出版社 一九六七）
- 村山知義『演劇的自叙伝』3（東方出版社 一九七四）
- 村田陽一編『資料集 初期日本共産党とコミンテルン』（大月書店 一九九三）
- 太田慶太郎『私の歩んだ道』（一九八六）
- 池田寿夫『日本プロレタリア文学運動の再認識』（三一書房 一九七一）
- 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』（『日本の近代』12（中央公論新社 一九九九））

中村抃三編『資料集成 小さな同志…日本におけるピオネール運動その全貌』I（『資料集 小さな同志』刊行委員会 一九九三）

土方正巳『都新聞史』（日本図書センター 一九九一）

筒井清忠『日本型「教養」の運命』（岩波書店 一九九五）

内務省警保局編『社会運動の状況』昭和二年・昭和四年・昭和五年・昭和八年

鍋山貞親『私は共産党をすてた』（大東出版社 一九四九）

飛鳥井雅道『日本プロレタリア文学史論』（八木書店 一九八二）

尾形半『特高警察読本』（松華堂書店 一九三二）

尾形明子『女人藝術の世界 長谷川時雨とその周辺』（ドメス出版 一九八〇）

尾崎庄太郎『われ、一粒の麦となりて』（結書房（発売は桐原書店） 二〇〇七）

不破哲三『小林多喜二時代への挑戦』（新日本出版社 二〇〇八）

富士辰馬『レーニン線上を歩むソウェート連邦』（平野書房 一九二七）

富田武・和田春樹編訳『資料集 コミンテルンと日本共産党』（岩波書店 二〇一四）

布施勝治『レーニンのロシアと孫文の支那』（燕塵社 一九二七）

風間丈吉『『非常時』共産党』（三一書房 一九七六）

- 福本和夫『非合法時代の思い出』（インタープレス 一九七七）
- 福本和夫『福本和夫著作集』第一〇卷（こぶし書房 二〇一〇）
- 兵本達吉『日本共産党の戦後秘史』（新潮文庫 二〇〇八）
- 平出禾『プロレタリア文化運動に就ての研究』（柏書房 一九六五）
- 平野謙『『リンチ共産党事件』の思い出』（三一書房 一九七六）
- 民主評論編集部編『闘いのあと』（民主評論社 一九四八）
- 立花隆『日本共産党の研究』（二）（講談社文庫 一九八三）
- 立野信之『青春物語』（河出書房新社 一九六二）
- 林房雄『消えぬ夢』（一九八二）
- 林房雄『文学的回想』（新潮社 一九五五）
- 林房雄『浪漫主義のために』（文学界社 一九三六）
- 鈴木卓郎『新聞記者の共産党研究』（経済往来社 一九七五）
- 脇村義太郎『東西書肆街考』（岩波新書 一九七九）
- 鷺田小弥太『野呂栄太郎とその時代』（北海道新聞社 一九八八）
- 壺井繁治『激流の魚』（立風書房 一九七七）

【定期刊行物】

『アカハタ』一九四七年一月二八日

『インタナショナル通信』二六年一二月八日（産業労働調査所）

『ナツプ』復刻版（戦旗復刻版刊行会 一九七八）

『プロレタリア科学』復刻版（法政大学出版局 一九七九～一九八〇）

『プロレタリア芸術』複製版（戦旗復刻版刊行会 一九八〇）

『プロレタリア文化』複製版（戦記復刻版刊行会 一九七九）

『プロレタリア文学』複製版（日本近代文学館 一九七二）

『マルクス主義』覆刻版（法政大学出版局 一九七一～一九七三）

『改造』二七年六月号（改造社）

『社会思想』復刻版（法政大学出版局 一九八一）

『社会主義研究』一九一九年九月号・一九二〇年六月号（平民大学）

『種蒔く人』復刻版（日本近代文学研究所 一九六一）

『新興教育』復刻版 第四卷（白石書店 一九七五）

- 『新潮』二七年五月号（新潮社）
- 『赤旗』再刊第七号（一九四五年一月一九日）
- 『赤旗』復刻版 第三卷（白石書店 一九七四）
- 『赤旗・階級戦』復刻版（法政大学出版局 一九七三）
- 『戦旗』復刻版（戦旗復刻版刊行会 一九七六～一九七七）
- 『前衛』21号（一九四七年一月）（日本共産党中央委員会 一九四七）
- 『前衛』復刻版（法政大学出版局 一九七一）
- 『前衛』複製版（戦旗復刻版刊行会 一九八〇）
- 『大衆の友』三二年二月号・三月号（日本プロレタリア文化聯盟 一九三二）
- 『中央公論』三〇年六月号（中央公論社）
- 『朝日新聞』一九三〇年五月一九日
- 『東京朝日新聞』一九二一年九月九日
- 『読売新聞』一九二四年一月一三日
- 『婦人戦旗』復刻版（戦旗復刻版刊行会 一九八〇）
- 『文化革命』1巻1号（民主主義文化連盟 一九四七年一月）

『文学新聞』復刻版（五月書房 一九八九）

『文芸戦線』復刻版（日本近代文学館 一九六八）

『無産者グラフ』1（1）・2（1）（無産社新聞社 一九二八・一九二九）

慶應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会編『東京帝大新人会研究ノート』一四号（一九九二）・一六号（一九九四）

内務省警保局編『特高月報』昭和五年七月

【原資料】

『N A P F N E W S』No. 12（一九二九年七月七日。法政大学大原社会問題研究所蔵資料）

『東京地方裁判所第二刑事部 徳田球一他三十六名治安維持法違反時事件 門屋博予審訊問調書』（法政大学大原社会問題研究所蔵資料）

「日本プロレタリア文芸連盟規定」（法政大学大原社会問題研究所蔵資料）

プロレタリア芸術聯盟「プロレタリア芸術聯盟宣言」（法政大学大原社会問題研究所蔵資料）。

「組織された！！『プロレタリア芸術聯盟』へ！！」（法政大学大原社会問題研究所所蔵資料）

## 論文の内容の要旨

論文題目 昭和初期左翼運動における権威性確立過程の研究  
氏 名 立 本 紘 之

本論文は主に昭和初期日本において、共産党の影響を受けた社会運動の内部で「権威」がどのように形成・確立されていったかという問題を、プロレタリア文化運動を対象として考察する。戦前期日本共産党がわずかな期間を除いては地下潜行的活動を展開する「見えない」党だった状況の中、当該期日本左翼運動の合法面つまり「見える」部分を広く担っていた文化運動関係者が、地下の見えない党を権威として受け入れていく過程を分析すると共に、戦後その関係者の多くが党中枢に関与することになる戦前期文化運動における党の権威の形成過程から戦後党運動に繋がる特質などを視野に入れた分析を行った。

論文は六つの章から構成されている。第一章「プロレタリア文化運動の萌芽と同時期の思想状況」では、1921（大正10）年のプロレタリア文芸雑誌『種蒔く人』創刊から、1924（大正13）年の『文芸戦線』創刊と同誌を中心とした活動高揚期までを対象に検討した。



当該期の文芸系知識人は社会運動への参画意識を強く持ち、左翼運動における自らの有用性を示すことを目的に運動論を展開していった。だが当時の文化運動は、左翼運動総体と同じく社会主義的意識を持つレベルの雑誌同人集団に過ぎなかった。

また運動理論面を見ると 1920 年代前半は、ロシア革命の原動力となった新しい社会主義「ボルシェビズム」の実態が、社会主義者の雑誌論稿などで徐々に日本に伝播し出した時期でもある。それらはまだ明治期以来の社会主義者たちによる「紹介」、そして運動に役立たせることを目的とした「伝道」の段階に留まっていたことを指摘した。

こうした状況が変化するのは、社会主義理論雑誌『マルクス主義』に福本和夫が登場した 1924 年末であるが、第二章「運動理論の大転換と文化運動組織の再編」では、その時期から 1927（昭和 2）年前半までを対象に検討した。福本和夫の理論の特質としては、彼の説く「分離・結合」という運動理論が、現実の事件によりその確かさを証明されると同時に、マルクス・レーニンの原典に基づく「マルクス・レーニンによって担保」された理論という点が挙げられる。また社会運動組織化の時代を迎え、これまでの「紹介」でなく強い「目的」を提示し、人々を牽引するには福本の理論は極めて有用であった。

加えてこの時期レーニン・スターリン文献が日本へ到来し始める。それは福本の権威を強化するのみならず、社会運動における知的源泉が「革命の祖国」ロシアへと向かう潮流を生み、日本の革命主導理論はマルクス主義からマルクス・レーニン主義へと移行し始めていった。

こうした思想状況の中で文化運動も組織化の時代を迎え、同時に学生中心の若い構成員が増加する。そして彼らが福本の影響を強く受けていたことから文化運動に「目的意識」と「権威主義」が持ち込まれ、単なる運動参加でなく政治運動への没入が志向されていく。

第三章「文化運動組織の「分離・結合」とその背景」では 1927 年中盤から翌 1928（昭和 3）年初頭までを対象に検討した。当該期の文化運動では二度の組織分裂が起こるが、そこではそれに関係した人々が「党の存在」を感じ取り、当時の最先端理論で武装することで権威に担保されたという意識を持ちながら組織分裂を引き起こした点が共通している。だがその分裂に際し「党指導」

に値する強い働きかけは存在しなかった。

理論面に話を移すと、この時期の一大事件がコミンテルンから下された「二七年テーゼ」である。同テーゼに関しては旧来問題視されて来たその受容自体よりも、権威の観点から見れば受容以前の日本で福本理論という外的権威に担保された理論に基づく他律的な運動が展開されていたことこそが、テーゼ受け入れを不可避なものにした点が問題となる。

またテーゼ受容と共に日本の社会運動における知的源泉がドイツを中心とするヨーロッパから完全にロシアへ移行したことも大きい。そしてこの知の変遷期に二七年テーゼ梗概の初訳出などで左翼論壇に登場したロシア知の保持者、蔵原惟人が当該期以降、ロシアの最先端理論の訳出・適用を積極的に行い、運動の中で権威を勝ち得たことを指摘した。

第四章「文化運動組織の発展と権威構造の形成」では1928年3月の文化運動統一組織「ナップ」の誕生から、1930（昭和5）年上半期までを対象に考察する。

ナップ結成後半年間の「芸術大衆化論争」は、三・一五事件後の急速な組織合同に伴う意見刷り合わせのため必要不可避だったが、現実運動局面からの要請により問題先送りの形で終止符が打たれる。

翌1929（昭和4）年のナップの実践活動の進展と客観的情勢成熟の判断は、文化運動の方針転換を齎し、見えない党を自発的に権威化する方向へ向かう。そしてこの方針転換を主導した蔵原惟人が情勢に応じて外来理論を選び取り、適用する運動スタイルを体得したことが以後の運動に大きな影響を与えていく。

その後1929～30年にかけての運動進展に伴い、再度の大衆化論争が発生する。そこでは文化運動の「立ち遅れ」を強調した上で運動の「原則性」の浸透、組織運動のラディカルな方向への変容が起こるが、この論争の過程などを通し「模範的共産主義者」としての振る舞いを蔵原惟人が見せ続けたことが原則性の希求傾向と蔵原の権威化を更に加速させたことを指摘した。

このように地下の党を権威として活動を展開していった文化運動と日本共産党の本格的接触は1929年に始まるが、そこから1931（昭和6）年までを対象に検討したのが第五章「一九三〇年前後の党運動と文化運動」である。

党運動との接触はまず「模範的共産主義者」蔵原惟人らを媒介に始まる。そのことは一般党員に蔵原を通して党の姿を見せることに繋がり、党の権威に加え党運動の体現者としての彼の権威が更に強固なものとなっていく。

だが 1930 年下半期その蔵原不在の中、党運動史上初めて一からの中央部再建を余儀なくされた状況で、質量共に大きな勢力となっていた文化運動が、党再建を担う諸団体の綱引きの場となる（「戦旗社」独立事件）。この際問題となるのが、現実には存在しない「党の権威」が有形無形の形で行使され、既に党を権威としていた文化運動がそれを拒否出来なかったことである。

翌 1931 年に蔵原惟人が日本の運動の場に復帰し、彼により文化運動の方針転換が提起される。この方針転換については旧来考えられていた「党指導」の産物ではなく、文化人の側が党の権威を組織運営のため自発的に利用し、文化人が党員となり文化運動を直接「指導」することで、運動停滞状況の打破を目指し、所謂「蔵原路線」と呼ばれる新方針採用に至ったというのが適切であると指摘した。

上記の方針転換に従い文化運動横断的統一組織「コップ」が設立された 1931 年末から 1934（昭和 9）年初頭の組織的文化運動の終焉までについて考察したのが第六章「コップ結成後の文化運動の進展と衰退」である。

設立当初のコップ傘下団体新雑誌では、これまでの運動経験を踏まえ「大衆化」の試みが多様な形で試みられた。

しかし 1932（昭和 7）年 3 月以降の文化運動への相次ぐ検挙で指導者蔵原らを失い運動は停滞、残された党員文化人（宮本顕治・小林多喜二ら）は立ち遅れ意識の強調に代表される蔵原路線の墨守的態度に終始していく。こうした状況に対する党員文化人とプロレタリア作家の相克や、作家内での「文学への回帰」意識の発生等を経て、財政難や治安維持法改正問題などに伴い 1934 年初頭に文化運動は組織的活動を休止することになる。

また同時期党員文化人宮本顕治が党中央に引き上げられるが、そこで見た党中央の現実と政治的蹉跎経験の中で宮本は、状況に合わせて理論を切り替える蔵原のやり方の重要性及び、そうした理論切り替えを有効に機能させるため、「一枚岩の前衛党」で適切な指導者が権力を安定して保持し続けることの重要性を体得した。そしてこの宮本の「政治的覚醒」が彼を蔵原の一フォロワーか

ら指導的性質を備えた存在へと変化させ、戦後の「政治家 宮本顕治」に繋がる原型を形作ったことを指摘した。

「おわりに」の前半ではこれまでの論を踏まえて、戦後の党運動・文化運動を対象に概括的に検討した。

これまでの章で述べた蔵原の理論的生産性と、権威によって文化運動を統御し状況に合わせて運動を変容させるスタイルを受け継いだ宮本は、戦後それを「党運動」という政治領域に持ち込んだ。そして「五〇年問題」解決後の党中央掌握過程で宮本は、状況に応じた理論的切り替えを行い、それを可能にし得る理論的人材を育成しながら「自主独立」路線を確立すると共に、革命集団、言わば「政社」の延長線上の存在であった日本共産党を民主主義社会の活動に堪え得る「政党」へと変容させた。

更にこうした運動の影で、理論切り替えの出来る組織権力を保持した宮本は自らの理論・運動の一貫した「確からしさ」を遡及的に確立させる言説を成していく。それにより戦前の党運動がある種「神話化」していったことこそが「党指導」意識を左翼運動の領域に浸透させた大きな要因の一つであることを指摘した。

次いで同章後半では結語として、戦前期文化運動の生成・発展過程における「見えない」党を権威とする構造の形成と、その媒介となる「模範的共産主義者」が状況に合わせた理論切り替え・運動指導を適切に行うことを理想とする特異な運動のあり方が、文化運動という特異な場から生成されたことの意義を述べる。

更にこうした運動のあり方に基づく宮本体制の確立と、それによる日本共産党の「政党化」にこそ、戦前期と戦後期の共産党運動の連続性はある、そうした意味でも共産党運動における権威の確立過程及び、その生成物である「模範的共産主義者による理論の切り替え」という運動スタイルを研究する意義があることを強調した。